

ウジハラ
先生の

環境にやさしく、住みやすい「人中心」のまちづくり

エコ・リバブルシティ

#01 都市と自然、人と車のためのまちづくり
(アメリカ・ポートランド)

市民の足を支えるLRT (MAX)

地元農家で賑わう
まちの広場

都市空間 (左側) と自然空間 (右側)、道路を境に明確に分かれている。

低炭素で住む人が暮らしやすい都市「エコ・リバブルシティ」を、世界の都市から学び、実現へ。都市計画学の研究をしているウジハラ先生の全4回連載コラムです。

コラム
内容

- #01 都市と自然、人と車のためのまちづくり
(アメリカ・ポートランド)
- #02 歩行者と自転車中心の賑わい空間
(デンマーク・コペンハーゲン)
- #03 人々にやさしい交通ネットワーク
(フランス・ストラスブール)
- #04 岡山をエコ・リバブルシティに

『人中心』のまちづくり

まちの中心部はMAXと呼ばれるLRTやストリートカー(路面電車)、バスなどの公共交通が縦横無尽に走り回り、それらが郊外の生活拠点に有機的につながる。ポートランドでは車をもたない人々でも日常生活で移動に困ることは少ない。都市政策の目標として、「移動の公平性(自動車がなくとも、誰もが目的の場所に自由に移動できること)」を掲げているためだ。中心部を囲む形で環状道路がきちんと整備されているため、郊外に比べて中心部の車がとても少ない。

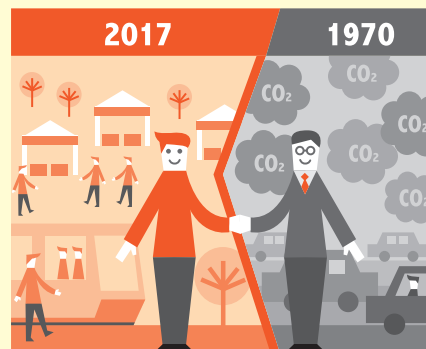
そこでは、公共交通や歩行者、自転車にやさしい『人中心』の空間が確保され、まちの広場は市民イベントで賑わう。その1つが地元農家によるファーマーズマーケット。都市近郊の農家が新鮮な食物をとり揃えて、私たちを待っている。

ポートランドでは無秩序な郊外開発を規制することで、都市周辺に優良な農地を確保している。メリハリある都市政策によって、車と人との空間、都市と自然との空間など、多様な空間の価値が守られている。

市民がまちを変えた

実は、いまから40年ほど前は、ポートランドもアメリカの他都市のように、自動車に依存し、まちの中心部は衰退していた。

いくつかの出来事により、『車中心』から『人中心』のまちづくりへ舵を切る。中心部の高速道路を撤去し広大な公園にしたり、まちなかの駐車場を市民が集まれる広場にしたり、自由に移動するための公共交通を充実させたりと、市民と行政が一緒になって、長い年月をか



け、まちを変える経験を積み重ねた。

その結果、環境にやさしい住みやすい都市としてのブランドも築かれた。都市や交通のかたちは、人々のライフスタイルの土台をつくる。いまではポートランド(市民)の生活のしかたにも注目が集まっている。岡山でも市民がまちを変え、ライフスタイルが目される日が来る。

岡山大学

うじはら たけひと

氏原 岳人 先生

都市計画学の研究者：環境制約・人口減少下で求められるサステナブルな都市・地域・国土計画、人間活動について探究しています。

岡山大学では、環境省・環境研究総合推進費によって「エコ・リバブルシティの都市構造モデルの構築とその計画論に関する研究」を推進しています。

